

地域と関わっていくということ ―余呉での取り組みから―

朽木 FS 研究員 増田 和也

朽木 FS の活動先の一つに、滋賀県・余呉町（現：長浜市余呉町）がある。余呉では焼畑を軸にした取り組みを始めている。文化人類学を専攻してきた私は、これまでも国内外のいくつかの農山村に通い、地域の方々から話を伺ったり、日々の作業や行いに同行させていただいたりしながら、地域の暮らしや社会のあり方を学ばせていただいていた。しかし、今回のように、現地に焼畑を拓き、そうしたアクションを通じて地域と関わる、というスタイルは初めてであった。そのために、これまでのプロジェクトを振り返ると反省点もいくつか思い浮かぶ。以下では、余呉での取り組みをまとめながら、その過程で考えたこと、発見したことなどを整理し、今後の方向性を示したい。

これまでの経緯：焼畑、そして余呉との出会い

私と余呉との関わりは、すでに 3 年になる。2006 年ごろより、焼畑耕作あるいは火入れによる林野利用に関心をもつ者たちが集まり、国内の農山村を訪ねたり、勉強会を開いたりするようになった。やがて、この集まりは「火野山ひろば」とよばれるようになり、そのメンバーを中心として現在の朽木 FS は構成されている。

私は 2000 年よりインドネシア・スマトラの森林地帯の村に通い、そこで焼畑耕作に出会った。調査村では大規模開発にともなう森林減少や商品経済の拡大により、自給自足的な焼畑を拓く世帯はすでにわずかであった。しかし、その耕作過程を調査しながら村びとの作業を手伝うなかで、私は焼畑に惹き付けられた。現地社会では、焼畑耕作には細やかな慣行が数多くあり、それらに反すると焼畑の精霊によって不幸がもたらされると信じられていた。また、私が過去のことを村びとに尋ねると、焼畑と結びつけて語られることもしばしばで、現地社会において焼畑という行いは現地の社会や文化のありようと深く結びつき、食糧生産という目的以上のいとなみであると強く感じるようになっていた。

とくに印象的だったのは、焼畑への火入れ作業であった。火を入れる前、焼畑の持ち主は私に対して、点火していく順路や万が一の場合の逃げ道などを説明し、そして火入れの恐ろしさについて体験をふまえながら語った。実際に、切り開いた林野に火を入れると、立ち上る炎は激しい音を立てながら私の背丈以上もの大きさにもなり、肌に刺すような熱



写真 1 焼畑の火入れに圧倒された(インドネシア・スマトラ・リアウ州)

を放っていた。焼畑の持ち主は火が大きくなるように風を呼び寄せるための呪文を唱えながら、裏返ったような高い声を上げていた。

しばらくすると、通りがかった村びとも立ち止まり、この他にも立ち上る煙で火入れを知った数人が集まってきた。そして、皆、世間話をしたり、冗談を言い合ったりしながら、炎が焼畑予定地を包み込んでいくのを見守っていた。このとき私が感じたのは、火入れは恐ろしいものである一方で、人を引き寄せるものでもある、ということだった。また、火入れという行いに恐怖や畏怖と同時に、ある種の高揚感を感じた。それまで火入れについては書物や映像を通じて知ってはいた。しかし、実際に火入れの場に接して、そうしたメディアが伝える以上のものを全身で感じ、圧倒されたのであった。

帰国後、焼畑は日本でも数十年ほど前まで山間部で行われており、関西圏でも滋賀という比較的身近なところでも焼畑が行われていたということを知り驚いた。こうして私は「火野山ひろば」に参加するようになった。メンバーの一人が余呉で焼畑をしているということを知り、余呉で焼畑を長らく続けてこられた永井さんを訪ねた。永井さんは、ご自身の暮らす集落で「摺墨（するすみ）山菜加工生産組合」を立ち上げ、焼畑で生産された山カブラを漬け物として加工し、その他にも地域の産物を出荷されていた。こうして、我々は余呉と出会うことになったのである。

我々が余呉に通うようになった最初の 2 年間、永井さんは余呉町内でもっとも北端に位置する中河内（なかのかわち）集落の山の斜面に焼畑を拓かれた。急な斜面の一面で、冬季は雪崩の発生するところだという。そこは雪崩が運んできた岩石が堆積しており、植生も藪状の場所であった。余呉の焼畑での主な作物はカブラである。余呉の山間部の集落には在来品種のカブラがあり、山カブラとよばれていた。カブラを漢字で書くと「蕪」である。つまり、葉（草冠の部分）が無い、という構成である。永井さんによると、カブラは葉がないものの方が根の部分が大きくなり、よいカブラなのだという。そして、こうしたガレた地質がカブラ栽培には適しているのだ、という。このようなことを伺いながら、胸を高鳴らせながら余呉に出かけた。



写真 2 余呉・中河内での焼畑(2007年11月)

菅並での取り組み

永井さんによると、焼畑を拓く場所はこうした雪崩跡の急斜面に加えて、山林を拓くこともあったという。京滋 FS プロジェクトが開始されると、ぜひ山林に焼畑を拓き、あわせて火入れによる植生や土壌の変化なども研究したいという意見がメンバーから上がった。永井さんに相談したところ、協力していただけることになった。永井さんは町内の知り合

いにも声をかけてくださり、焼畑のための候補地をいくつか挙げてくださった。2009年1月下旬、メンバーは候補地を見て廻り、菅並集落内の林野にある一画を選んだ。

菅並集落は高時川沿いの広い谷間に位置する。2010年2月の世帯数は41戸だが、空き家も含めると70戸ほどの家々が並び、比較的大きな集落であるといえる。明治期には高時川上流部で構成されていた行政村の中心でもあったという。実験地としてお借りしたい場所は、集落から高時川をはさんだ対岸に広がる財産区林の一画で、集落からもすぐ一望できる場所である。集落から近い方がアクセスもよいし、また地域の方々からも我々の取り組みの様子がわかりやすいだろうということを考えての選地であった。選んだ場所は40年生ほどの広葉樹林で構成されている。

菅並の林野の一画をお借りし、焼畑を拓きたいという願いは、2009年の春先に開かれた集落の寄り合いで諮られ、承諾をいただくことができた。そして、4月の初旬、余呉湖畔の余呉湖観光センターで菅並の区長さんや財産区の方々、摺墨の方々と顔を合わせを行うとともに、菅並区とは覚え書きを交わした。そして5月後半に作業を開始した。余呉では、8月の盆前後に火入れを行い、11月ごろにカブラの収穫時期を迎える。カブラは、霜が降りる季節に入ると味が締まるという。このような農耕暦にしたがって盛夏に火入れを行うには、我々の作業開始はやや遅いといえる。というのも、伐開した樹林の幹や枝を燃やすには、これらが十分に乾燥するための期間が必要であるからである。ましてや梅雨の時期をはさむことになり、条件はよいわけではない。こうしたこともあり、我々は当面、森の伐開作業に集中することになった。

作業には、区長さん・財産区長さんと在所の方がもう一人の計3人が加わってくださった。こうして8月初旬にかけて計5回ほど菅並に通い、伐開作業を行った。作業は午前9時過ぎごろから始まり、お昼休みをはさんで夕方まで続いた。作業の合間には菅並の方からの差し入れもあり、これらをごちそうになりながら菅並についての話を伺った。また、伐開作業と平行して、「火野山ひろば」のメンバーである野間直彦さん（滋賀県立大学環境科学部）が植生調査を、本プロジェクトの助教である鈴木玲治さんが土壌調査を行った。7



写真3 伐開作業。作業地の向こうには、菅並の集落が広がる(2009年7月)



写真4 焼畑予定地として伐開された林野(2009年7月)

月末ごろには、焼畑耕作地とその周囲の防火帯を含めた面積を何とか拓くことができ、火入れを8月10日と定めた。

しかし、火入れを直前にした8月5日、区長さんより集落の中から火入れを心配する声があるということを知った。FSメンバー内で相談した結果、集落に一人でも火入れを心配される方がいる中で実施するのではなく、集落の方々ともう一度話し合おうということになった。菅並では、数十年前に萱場で大きな山火が発生し、それ以来、菅並では焼畑も含めて、萱場や林野への火入れは行っていないのだという。我々は火入れを行うにあたり、万一の場合に備え、周囲の森に延焼しないよう防火帯をつくり、集落の消防用のポンプとホースを用意し、作業地のすぐ下を流れる高時川から水を取れるように河川沿いの藪を払うなどの準備をしていた。しかし、山に火を入れるということをめぐる思い浮かべるものは、地域の方々と外部者の間では異なる、ということあらためて感じた。

こうしたこともあり、我々の実験地は急遽、移されることになった。余呉町内には「ウッディーパル余呉」というレクリエーション施設がある。その内にあるスキー場の無雪期の活用について、永井さんは支配人から相談を受けており、スキー場の草地に焼畑を拓くことを提案されていた。そこで8月中旬に草刈りを行い、8月20日に火を入れた。FSではその一画をお借りすることになり、複数種のカブラやダイコンを播種した。こうして、焼畑耕作を行うことはできたものの、急遽、場所を移したこともあり、個人的には、ただ焼畑を行ったということだけに終わってしまった気がした。

こうした経緯をふまえ、これまでの取り組みを思い返してみた。それまで私は何度も菅並に通ったものの、ひたすら伐開作業に始終しており、作業に加勢してくださった3名の方以外の菅並の方々とはまったく話をする事がなかった。そして、私たちの取り組みの目的や目指すことなどについて、集落の方々に対して具体的に説明する機会も設けてこなかった。4月に顔合わせの場をもち、作業には集落の3名の方が加勢に来てくださったこともあり、地域との関係はでき上がっていると勝手に思い込み、私の関心は時期的に遅れ気味の伐開作業に向かっていた。また、私の調査スタイルでは地域の方々との聞き取りによる情報が重要な位置を占める。にもかかわらず、この間の私はすっかり伐開の作業要員と化し、まったく自分なりのスタイルで菅並集落に関わる事ができていなか



写真 5 赤子山スキー場の草地に開いた焼畑で収穫(2009年11月)

った。さらには、当面の関心が焼畑だけに偏り、菅並での暮らしを広い視点でみていこうという姿勢も失われていた。あらためて振り返れば、実践型地域研究として焼畑耕作というアクションは起こしながらも、多くの方々との関わりのなかで取り組みを展開していく視点がまったく欠けていた。私はまったく地域と向き合っていなかったのである。

広い視点で関わっていくこと

火入れ延期を機とした反省もあるが、じつは作業の休み時間に菅並の方との雑談のなかで得られた発見もある。それがヤマグワのことである。

伐開の作業をしていたときのこと。作業の合間の休憩時間に、作業の加勢に来ていた地元の方々と雑談を交わすなか、ふいにヤマグワのことが話題となった。余呉の焼畑では、1年目にカブラ、2年目以降にはソバもしくはアズキを育てた。そして、こうした一年生作物の後には桑を収穫していた、と伺っていた。当時、桑の葉は、蚕



写真 6 山の中の焼畑跡地の脇には桑の木が残っている(2009年9月)

のエサとして収穫されていた。余呉町の間部から木之本町、湖北町を経て琵琶湖に流れる高時川の流域一帯では、明治期から1970年頃まで養蚕が盛んであった。そのために桑はきわめて重要であった。焼畑地の選定のことを尋ねると、まず道路に近いことが条件に挙げられた。これは焼畑で収穫した桑の搬出を考慮してのことだという。こうした話を聞いて、焼畑後に桑の苗を植えているものだと、私は考えていた。というのも、焼畑で幾種類かの作物を栽培した後に多年生作物を植える、ということは広く報告されているからである。たとえば、かつて四国・高知の山地ではミツマタが、山形・温海ではスギやヒノキが、はるか遠くインドネシアのスマトラの村ではパラゴムノキ(栽培ゴム)が焼畑地に植えられてきた。私はこうした事例を思い浮かべながら、焼畑後に桑を植えるものだと思ったのであった。

けれども、菅並の方によれば、こうした桑はヤマグワとよばれ、焼畑を拓いても桑の根が土中に残っているのだという。ただし、それが自生のものなのか、昔の人が植えたものかどうかは不明である。また、人によっては桑を植えていた場合もあったかもしれない。ヤマグワの葉は常畑の桑とは栄養価がちがうためか、ヤマグワを与えた蚕は病気になりにくいということで、ヤマグワの葉は高く売買されていたそう。菅並でも戦後しばらくまで養蚕をしていたが、菅並の人はヤマグワの葉を自宅の蚕に与えるほかに、川下の商人に売買してもいたようだ。こうした会話のなかで、菅並の方々から養蚕にまつわる話はずいぶん上がってくるのであった。ヤマグワだけでは必要量をまかなえないため、当時は畑

以外にも土手や河原などのわずかな空き地にも積極的に桑を植えていたこと。今でも集落脇の河原には桑の株が残っているが、草刈りのときに一緒に刈られてしまうため大きくなることはないこと。当時の家の中は蚕棚だらけで、子供たちは蚕棚の横で丸くなりながら寝たこと。当時の菅並の暮らしと焼畑・蚕・桑の結びつきは想像以上に深いものようだ。

こうした驚きとともに、すぐに思い浮かんだことが「火入れは山の潜在力を引き出す」ということであった。これは朽木 FS の今北研究員がよく口にする言葉だが、菅並ではその一例がヤマグワなのだろう。林野への火入れ（あるいは伐開）によって、それまで息を潜めていた植物がむくむくと姿をみせるということは、植物生態学で学ぶ植生遷移として位置づけられ、さして驚くことではないかもしれない。けれども、こうして、焼畑や養蚕という人びとの暮らしと特定の植物種とのつながりが具体的に浮かび上がってくると、新鮮な驚きと興味が湧き上がってくるのであった。

その後も永井さんから話を伺ううちに、一口に桑といっても、じつは幾つもの品種があることがわかった。たとえば、シンザエモン。この名は、昔、シンザエモンという人物がこれをこの地域に持ち込んだことに由来するという。これは、田畑の端や河原に植えられている。一方、山にヒトリバエするのがヤマグワとギラである。ギラの名は、その葉の表面に光沢があり、陽の光をギラギラと照り返すことに由来する。かつて焼畑跡にはギラばかりが生えてくるところがあり、そのようなところはギラバタケとよばれた。ヤマグワとギラの葉を食べた蚕は、糸の検収率がよく、高値で取引された。しかし、これらの葉は薄く、籠にいっぱい詰めても荷は軽く、嵩はあっても蚕は瞬間に食べ尽くしてしまう。そのため、1日に数回も焼畑跡まで葉を摘みに出かけたという。

このように、食糧生産のために拓いた焼畑は、桑の自生を促し、しかも野生桑は栽培種よりも高い価値をもっていた。このため、人びとは焼畑休閑後も桑の葉を摘むために焼畑跡へ何年間も通った。そして、桑の樹が大きくなり葉を摘みにくくなると、桑を切り倒してふたたび焼畑を拓いたという。つまり、焼畑－桑畑－焼畑というサイクルが生み出され、余呉の焼畑はこの地の生態的条件と当時の地場産業とが上手く適合した生産システムの一例であった。もっとも、焼畑は桑がよく生えるところをわざわざ選んで拓いていたわけではないというので、このようなサイクルがみられたのは、ごく一部であったかもしれない。

以上のように、私は余呉における焼畑を含めた山林利用に対して新鮮な驚きと興味をもつようになった。そして、この間の反省もあり、ふとヤマグワを手がかりにして今後の取り組みを再構成してみてもどうかと思うようになった。現在では、焼畑



写真7 「シンザエモン」の葉(2009年9月)

も養蚕も過去のものと思われている。山には人工林が広がり、林業の低迷で近年は山に入る人も少ない。けれども、余呉の自然環境の特色は山であり、そこから得られる恵みであろう。そこで、ふたたびヤマグワに注目してはどうだろうか。

まず、桑や養蚕を手がかりにして、かつての農作業や山林利用について話を深めていく。これは、菅並の方々との交流を深めることにもつながる。また、せっかく自然科学系の研究者と共同で研究をしているのだから、伐開地でヤマグワがどのように、そして、どの程度ヒトリバエするのかを具体的に検証することもできよう。そして、養蚕やヤマグワに注目しながら、かつての余呉における山林利用がどうであったのかを検討する。と同時に、実践型地域研究として、こうした成果を地域とつなぐことを試みたい。

今日、桑の葉に蚕のエサとしての需要はないが、桑には昔から薬用効果が知られ、一部では健康茶として販売されている。果実もおいしい。ならば、養蚕において栽培種よりも高い評価であったヤマグワは、飲食や薬用にもうってつけではないだろうか。何よりも、ヤマグワは森を拓けばヒトリバエしてくるのであり、この地域に根ざした資源である。もちろん、商売として成立させるには、多くの課題があるにちがいない。しかし、ヤマグワは、この地域で盛んであった養蚕、焼畑、その他の山林利用を結びつけるものであり、当時の暮らしを具体的に伝える郷土史の資料ともなりうるであろう。また、ヤマグワのために森を拓くことは植生を更新させ、多様な植生状況が生み出されるために生物多様性にも寄与するとも考えられ、ヤマグワを新たな価値とともに位置づけることができるかもしれない。

終わりに

フィールドワークの楽しみは、それまで思いもしなかったことがらに出会うことである。余呉において、私がもっとも心を躍らせたのは、ヤマグワとの出会いであった。焼畑だけが余呉の山林利用の特徴なのではない。ヤマグワに注目してみると、焼畑にとらわれない幅広い視点で、暮らしと結びついた余呉の山林利用を見つめ直すことができるかもしれない。今後は、ヤマグワを手がかりにして余呉に向かおうと考えている。